様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０６３７４

研究課題名（和文）担い手と営みの重層性に着目した文化的景観の記述手法とマネジメント手法に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Manegement Framework of Culturarl Landscape

研究代表者
佐久間　康富（Sakuma, Yasutomi）

和歌山大学・システム工学部・准教授

研究者番号：３０３６７０２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、あり様が多様な「文化的景観」を理解し、次世代に送り届けるために、河内長野市流谷集落を対象にし、以下を明らかにした。
1）文化的景観の景観構成要素は、面、線、点、無形に分類することができ、景観への関わりには土地、生活、信仰に起因するものに整理できることがわかった。2）景観構成要素の関係に着目し、水系と維持管理の仕組みは重層的に関係していることを明らかにし、文化的景観のマネジメントには水系とその維持管理の仕組みが単位となることが示唆された。3）維持管理の担い手ついて、1世帯あたり、約2.3人の集落外担い手が関わっており、血縁・地縁者が73%、他所者が17%であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通じて、目に見える景色だけではなく、風景を下支えする生活の営みまでを含む「文化的景観」を取り上げ、事例研究を通じて、文化的景観を記述し理解する要素を整理することができた。また「交流人口」「関係人口」に関心が高まる中、集落景観の維持に対して、集落外の担い手の関わりが1世帯あたり約2.3人であることを明らかにし、定量的記述することができた。今後集落景観を維持していく上でどの程度の関わりが必要となるのか一つの基準となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the description method of "cultural landscape" from the case study in Nagaredani village, Kawachinagano city. The following three points were clarified. 1) The components of "cultural landscape" are polygons, lines, points and intangibles. 2) Management of cultural landscape is based on a unit of water system and its maintenance. 3) As for the personnel of management, the personnel outside the village is 2.3 persons per household. 73% of the personnel are relatives and local residents, and 17% are non-local residents.

研究分野：都市・地域計画

キーワード：景観　文化的景観　景観構成要素　記述手法　マネジメント　担い手　他出子

１．研究開始当初の背景

・文化的景観にみる重層性の共有の必要性： 後藤春彦[注1]によれば「景観」の概念は可視的形象と地域単元をあわせたものだとされているが、特に「文化的景観」は、空間・環境だけではなく、人々の営みを含む風土から形成されるものである[注2]。文化的景観は多様な要素が重層しており、人々の営みの変化を受け止めながら「営みの真実性」[注2]を継承していくことが求められている。時代の変化にも合わせ、物理的空間だけでなく人々の営み、も含めた動的・総合的景観マネジメントが必要である。

注1　後藤春彦（2007）：『景観まちづくり論』、学芸出版社

注2　日本建築学会（2011）：『未来の景を育てる挑戦　－地域づくりと文化的景観の保全－』、技報堂出版

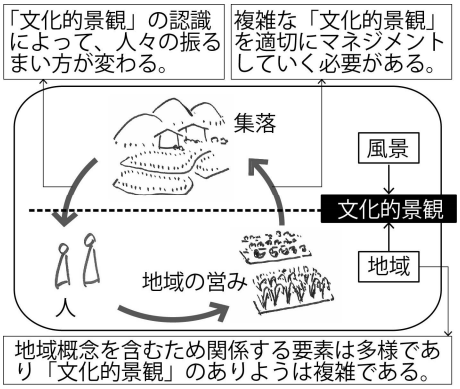

図１．文化的景観の構成要素と課題

・既往の研究成果：申請者は既往の共同研究において、地域の人々の記憶を収集し、その積層から地域の集合的景観像を描く「まちづくりオーラル・ヒストリー」法（以下、まちづくりOH）を開発した【『まちづくりオーラル・ヒストリー　―「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く』、後藤春彦・佐久間康富・田口太郎、水曜社、2005】。都市部では特定領域を超えて地域空間の総合的課題を扱う地域型NPOの活動領域の拡大プロセスを明らかにし、【都市をつくる仕事へのまなざし（『いま、都市をつくる仕事　未来を拓くもうひとつの関わり方』、日本都市計画学会関西支部・次世代の「都市をつくる仕事」研究会編）、佐久間康富、学芸出版社、pp.158-165、2011】、人口減少社会の課題先進地である農山村部では農山村住民と都市住民が流動しながら重なり合い、都市住民自らの知識・技術を提供して地域づくり活動に参画することを目指した「協働の段階」の都市農村交流の広がりとその課題を明らかにした【都市農村交流における主体間関係の整理ツールの開発－福島県川俣町における地域づくりインターン事業からの検討、佐久間康富・図司直也・筒井一伸・海老原雄紀、農村計画学会誌、査読あり、29-4、pp.473-481、2011】。人々の記憶の積層から地域の集合的景観像を読み解き、景観マネジメントをはじめとする地域の担い手の活動領域も重層していることを明らかにしてきた。

・着想に至った経緯：こうした地域型NPO、「協働の段階」の都市農村交流には共通の課題があった。人々の営みも含む景観マネジメントにおいて、その成果や成果への手法が当事者間では共有されるが、それ以外のものには伝わりづらい。地域型NPOは活動領域が広範で当事者以外の市民、支援する行政担当者が取り組みの全体像を把握することが難しい。「協働の段階」の都市農村交流も、都市農村交流を企画・運営する市町村行政の担当職員やボランタリー組織メンバーなどの「地域マネージャー」が、都市農村交流に直接携わらない地域住民や行政内の財政部局に対して、その成果を伝えられていない。こうした課題は、「文化的景観」という対象において典型的に現れることに着想を得た。文化的景観という対象から、積層する要素の記述と共有手法を明らかにすることで、景観マネジメントにおいても複雑な文化的景観の様相をわかりやすく表現し、市民と景観の担い手間で共有する社会技術の開発を通じて、これらの課題解決に貢献したい。

・総合的な景観マネジメント手法顕在化の必要性：人口減少に転じたわが国では都市郊外部、農山村地域での景観の担い手は減少している。少ない担い手や組織・施設が複数の機能・役割を果たすことが期待されている。景観の担い手に対しても期待される役割が重層し、景観の担い手の間でわかりやすく共有する手法が求められている。

２．研究の目的

人々の営み、地域概念を含み、そのあり様が多様な「文化的景観」の理解を進め、「営みの真実性」を次世代に送り届けるために、以下の２点を明らかにする。

（１）文化的景観の記述手法：既往の文化的景観の記述方法を分析し、対象事例を確定する。その上で、地域の人々の記憶の積層から地域の集合的景観像描くまちづくり「オーラル・ヒストリー法」により営みの重層性に着目した文化的景観の記述手法を明らかにする。

（２）景観マネジメント手法：既往の文化的景観の記述方法を分析し、対象事例において担い手の重層性に着目した景観マネジメントの体制を明らかにし、記述された文化的景観との関係を明らかにする。政策担当者（自治体・地域型NPO）の評価を受け、政策課題を明らかにする。

３．研究の方法

以下の方法により、文化的景観の記述方法と景観マネジメント手法を明らかにする。

（１）文化的景観の記述手法：既往の文献から文化的景観の記述方法を収集・分析し、対象事例を確定させる。対象事例の景観の担い手に対して、まちの景観に対する記憶を収集し地域の集合的景観像を明らかにする。既往の記述方法の分析を参考に、営みの重層性に着目した文化的景観を記述する。河内長野市流谷集落での事例研究においては、対象地での実地踏査とインタビュー調査から現在の水理システムと土地利用を明らかにし、その変遷から両者の関係を明らかにする。

（2）景観マネジメント手法：既往の文献から文化的景観のマネジメント体制を収集・分析する。あわせて対象地域の景観の担い手・地域マネジメント主体へのインタビューから景観マネジメント体制を明らかにする。

4．研究成果

本研究は、人々の営み、地域概念を含み、そのあり様が多様な「文化的景観」の理解を進め、「営みの真実性」を次世代に送り届けるために、主に大阪府河内長野市の流谷集落を対象にし、以下の 3 点を明らかにした。

（1）調査対象集落の文化的景観の景観構成要素は、面、線、点、無形に分類することができ、景観への関わりには土地に起因するもの、生活に起因するもの、信仰に起因するものに整理できることがわかった。また、集落の社会状況の変化に応じて、景観が変化してきた変遷を明らかにすることができた。

（2）水系と土地利用の景観構成要素の関係に着目し、土地利用の変遷にともない水系の維持管理の仕組みが弱体化し、水系と維持管理の仕組みは重層的に関係していることを明らかにした。また、耕作地が転用される条件から、文化的景観のマネジメントに際して、水系とその維持管理の仕組みが単位となる可能性が示唆された。

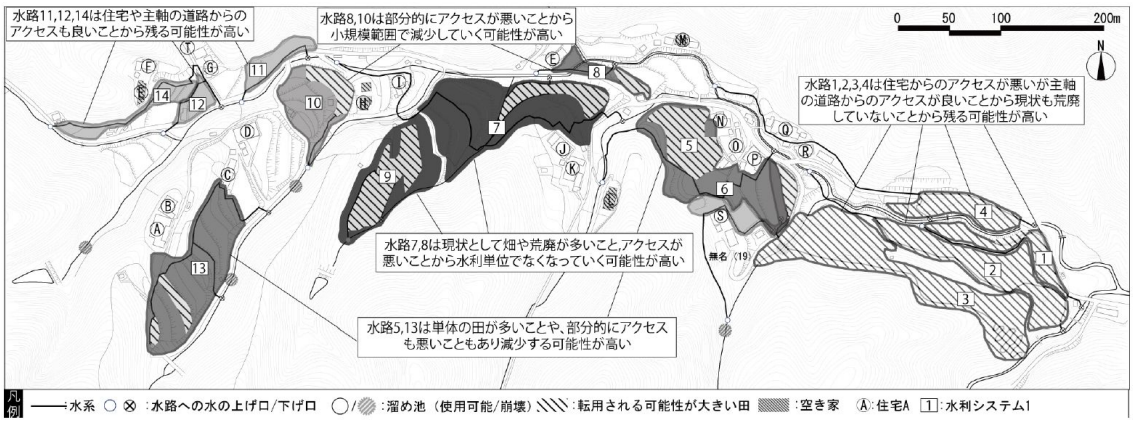

図 2. 水理システム単位にみた流谷集落

（3）集落景観の維持管理の担い手ついて、担い手 1 世帯あたり、約 2.3 人の集落外担い手が関わっており、集落外の担い手は他出子を含む血縁・地縁者が 73%、定住者と血縁・地縁の関わりがない他所者が 17%であることを明らかにした。人口減少社会への対応として、集落外住民による集落景観の維持管理への関わりを集落空間と対応づけて実証することができた。

以上から、文化的景観に対して働きかける際に、対象を理解する枠組みであり、働きかける枠組みとしての「空間的技法」と、働きかけをしようとする主体の意思である「計画的思考」が手がかりになることが示唆された。

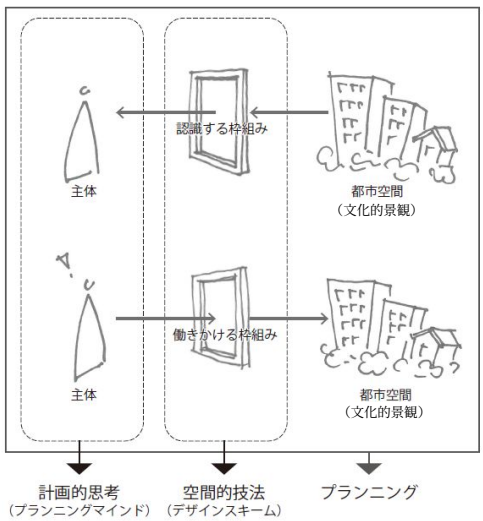

図 3. 文化的景観を理解し働きかける枠組み

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6　件）

1. 佐久間康富・嵩和雄：田園回帰における空き家利活用の課題と可能性、統計、査読なし、No.70-2、2019 年、pp.29-35
2. 佐久間康富・嵩和雄：「空いていない空き家」を地域資源として活用する（特集：急がれる空き地・空き家の管理 ―所有者不明土地の利用の円滑化等に関する特別措置法の成立）、地方議会人、株式会社中央文化社、査読なし、No.49-5、2018 年、pp.16-19
3. 佐久間康富：空き家の利活用に対する地域社会の役割―「少人数社会」の仕組みの創造への期待（特集：地域は人がつくる ～移住と交流人口の拡大に向けて～）、NETT（一般財団法人 北海道東北地域経済総合研究所機関誌）、査読なし、No.102、2018 年、pp.8-11
4. 佐久間康富：「住み継がれる」概念と「縮み方のシナリオ」、月刊地理、査読なし、No.63-6、2018 年、pp.62-67
5. 佐久間康富：空き家の利活用に果たす地域社会の役割　「地方移住」のハードル：住まい・

コミュニティ、情報誌『100 万人のふるさと』2018 年早春号、特定非営利活動法人ふるさと回帰支援センター、査読なし、2018 年、pp.10-13

6. 宮地聡・金田聖輝・川江祐司朗・向井雅人・大村りか・芳永有梨・佐久間康富・嘉名光市・阿久井康平:中山間集落の水理システムと土地利用の変遷および関係について　－文化的景観としての河内長野市流谷集落におけるケーススタディ、日本建築学会技術報告集、査読あり、23-55、2017 年、pp. 991～996、https://doi.org/10.3130/aijt.23.991

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　2　件）

1. 武田重昭・佐久間康富・阿部大輔・杉崎和久編著『小さな空間から都市をプランニングする』、学芸出版社、2019 年、240 ページ
2. 山﨑義人・佐久間康富『住み継がれる集落をつくる』、学芸出版社、2017 年、232 ページ

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：筒井　一伸

ローマ字氏名：TSUTSUI Kazunobu

所属研究機関名：鳥取大学

部局名：地域学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：50379616

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。